

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00615

研究課題名(和文) 日本語名詞の意味機能と統語的特性：同格名詞句と文法化現象からの検証

研究課題名(英文) Semantic functions and syntactic properties of nouns in Japanese: An examination of appositive nominals and grammaticalized classifiers

研究代表者

眞野 美穂 (Mano, Miho)

大阪大学・大学院人文学研究科(人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻)・准教授

研究者番号：10419484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、形態的・統語的手がかりの少なさから研究が遅れていた日本語の名詞について、これまであまり注目されてこなかった言語現象(同格名詞句、名詞から文法化した類別詞、名詞述語文、数量詞を含む同格構造)を対象に研究を行い、名詞の持つ意味機能と統語的特性、そしてそれに影響を与える要因を探った。その結果から、同格名詞句構造に生じる名詞句の意味関係とコピュラ文との共通性、ならびに二股枝分かれ構造という文の統語構造との共通性、名詞から類別詞に文法化する過程で変化する機能、名詞述語文の叙述の特徴、数量詞を含む同格構造と同格名詞句の共通点と相違点、を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、次の3つの点で学術的意義があると考えられる。これまであまり研究が行われてこなかった名詞に関わる言語現象(同格名詞句・名詞から文法化した類別詞・名詞述語文の叙述の類型)を扱った点、複数の言語現象を多角的、統合的に検討し、名詞の特徴を探った点、それらの特徴と、これまで明らかになっている言語現象の特徴との間に共通する普遍的な統語規則を探った点、である。これらを通し、日本語において、名詞の持つ意味機能と統語的特性の一端を明らかにすることができたと考えられる。また、これらの研究結果は、今後の日本語教育などに応用が可能なものと考えられ、将来的に社会的に貢献可能なものと言える。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on nouns and noun phrases in Japanese, which lacks research compared to verbs due to the lack of morphological and syntactic clues. Through the analysis of the linguistic phenomena that have not received much attention (appositive nominals, classifiers grammaticalized from nouns, nominal predicate sentences, and appositive quantifiers), I examined their semantic functions, syntactic properties, and the factors that influence them. The results revealed: (1) the semantic relations of noun phrases in appositive nominals and their similarities with copula sentences, and their binary branching structure, (2) the functions that change when a noun is grammaticalized into a classifier, (3) the characteristics of event predication by nominal predicate sentences, and (4) the similarities and differences between appositive quantifiers and appositive nominals.

研究分野：日本語学、語彙意味論、形態論、統語論

キーワード：同格名詞句 類別詞 文法化 名詞 日本語

## 1. 研究開始当初の背景

言語研究において、名詞は動詞と並び、文を構成する重要な要素であり、ほぼすべての言語が持つものとして、これまで多くの研究がなされてきた(本報告書では、特に断りがない限り、「名詞」を名詞句も含むものとして使用する)。特に、言語研究が盛んに行われてきた印欧諸語では、名詞は様々な接辞付加や語形変化などを持ち(例えば、単複の区別や、男性/女性名詞の区別)、冠詞の形式やその有無なども含め、手がかりとなる形式を多数持つことから、多くの研究の蓄積がある。そこでの研究対象は、名詞の意味的な特徴だけでなく、名詞句の構造、名詞化の問題、述語名詞、名詞に含まれる意味特性、文中での機能に至るまで、幅広いものである。

一方で、日本語研究に目を向けると、名詞研究は動詞研究に比べて非常に遅れており、その対象も連体修飾や指示性など限定される傾向があり、他言語における名詞研究と比較すると統語的分析が圧倒的に少ないなど、課題が多数あげられる。これには、日本語の名詞に印欧諸語のような形態的な特性が欠けていること、冠詞が存在しないこと、述語に一致現象がほぼ見られないこと、など様々な要因が関わっていると考えられる。

しかし、近年、日本語においても少しずつ名詞への注目度が増加してきており、名詞の性質と機能を探る研究が徐々に行われつつある(研究開始当初に比べ、さらに現在、その注目度の増加は明白である)。これらの中で特に着目されているのは、名詞の持つ重要な2つの機能としての「指示機能」と「叙述機能」であるが、他言語で行われている名詞研究での詳細な分析に比べ、未だ研究されていない部分が多い。

このような学術的背景の中で、解明されていない重要な問いが、名詞自体の持つ意味的な性質と統語的特性、そしてこれらと文中での機能の関係である。本研究は、この課題に対して、主に名詞句の単位を対象にし、文中での働きに焦点を当て、取り組むものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語において名詞が持つ統語的特性と機能、そしてそれに影響を与える要因を明らかにすることである。名詞が、動詞と並び文を構成する重要な要素であることは一般的に知られていることである一方で、日本語の名詞自体の統語的分析は、形態的・統語的手がかりの少なさから、動詞と比べ非常に遅れていることを1で述べた。本研究では、同格名詞句の分析と、名詞から類別詞への文法化データという、これまであまり注目されてこなかった言語現象のデータを使用し、多角的に考察することで、手がかりの少ない日本語の名詞の統語的特性と意味機能について、新たな知見を得ることが目的である。特に、本研究では、①名詞の持つ意味と統語的特性の関係、②その性質に影響を与える意味機能、に着目し、それらの解明を目指す。

## 3. 研究の方法

本研究の当初の計画では、これまで名詞研究では注目されてこなかった(1-2)の言語現象を対象に、名詞の異なる側面に焦点を当て分析を行い、それらを多角的に、そして統合的に考察することで、名詞自体の持つ統語的特性と文中での機能の解明を目指す予定であった。しかし、その研究の過程で、関連する2つの言語現象(3-4)の重要性が分かったため、対象を広げ、以下の方法で研究を行った。

### (1) 同格名詞句構造

同格名詞句とは、2つの独立したアクセントを持つ名詞句が並び、両方が文中で同じ役割を担い、同じ指示対象を持つ「長男 健一」や「英女王 エリザベス」のような構造である。間に形態素を介在させずに複数の並置された名詞句から形成されるものであるにも関わらず、その語順には制約があり(例えば、「\*健一 長男、エリザベス 英女王」)、それは属格による修飾関係よりも厳しいものであることが分かっている(眞野 2016a、2017)。この制約には名詞句自体が持つ意味と、その統語的特性が関わることが示唆されたため、コーパスを使用し、これまで固有名詞を含むものに限定していたデータを普通名詞にまでに範囲を広げ、生じる名詞の意味的特徴と統語位置、名詞句間について意味的、統語的分析(言い換えられる他の言語構造との比較を含む)を行う。これにより、名詞句自体の持つ特性を探る。

### (2) 名詞から類別詞への文法化

名詞の統語的特性と機能の解明には、文法化データの分析も有用であることを提案し、その分析を行う。本研究では、多数観察される名詞からの類別詞の文法化(例:三つの班→三班)の過程を統語的に分析する。コーパスを使用してデータを収集し、名詞として使用される場合の性質と、文法化し類別詞として使用される場合の性質の違いを統語的に分析する。文法化の過程で名詞の持つどのような統語的特性や機能が失われ、どのような性質が獲得されるのかを、言語現象の観察を通して探ることで、名詞の意味機能を明らかにする。

### (3) 名詞述語文

(1)の同格名詞句の研究を通し、名詞の叙述機能を探るためには、名詞の述語としての性質の解明が不可欠であることが分かったため、名詞述語文を対象に、それが行う叙述について検討することとした。叙述類型論において名詞述語文(「主題-解説」構造を持つもの。例)日本は島国だ)は、典型的には属性叙述(カテゴリー属性)を行うとされるが、事象叙述を行うことも可能である(例)ひどい頭痛だ)。事象叙述を行う名詞述語文の特徴については、個別の現象として分析されることはあっても、包括的にそれらの共通点を探る研究は不足しているため、その調査および検討を行う。

#### (4) 数量詞を含む同格構造

研究を進める中で、(1)と(2)の現象の接点となるのが、「学生 3 人」のような、数量詞を含む同格構造であることが分かったため、その特徴について、特に同格名詞句との対照させることで、検討する。数量詞の研究の中では、数量詞遊離現象について多数の研究が行われてきたが、数量詞同格との解釈の違いを、同格構造の持つ特性と照らし合わせることで探っていく。

### 4. 研究成果

3で示したそれぞれの研究の分析結果から得られた成果を以下に示す。

#### (1) 同格名詞句研究

全く形態的手がかりのない同格名詞句間の関係が理解されるためには、その語順と名詞句の本来的意味が重要であるが、さらに背後には、文構 r 造にも共通する普遍的な統語規則が存在することが予想される。これらのことを念頭に置き、日本語同格名詞句を分析し、以下のことを明らかにした。

##### ① 同格名詞句を構成する名詞句の性質

同格名詞句の範囲を明らかにするため、コーパス調査を行った。眞野(2016)のデータは固有名詞を含むもののみを対象とした調査によるものだったためである。固有名詞句を含まない同格名詞句の有無を確認するため、『日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を使用し、NP1、NP2という2つの名詞句の品詞分類を「普通名詞」に限定し、中納言 1.1.0の長単位検索を使用し、検索を行った。その結果、88,220件のデータを得た。抽出調査を行い、同格名詞句の構造がないか確認した結果、同格名詞句の条件を満たすものは見つからなかった。このことと、眞野(2016)の調査結果(表1参照)を照らし合わせ、日本語同格名詞句は基本的に、少なくとも指示的な機能を担う名詞句(固有名詞や代名詞など)が1つ必要であるということが明らかとなった(詳細は、眞野(2020a)を参照)

##### ② 同格名詞句に見られる意味関係

コピュラ文に「措定」を行うもの、「指定」を行うもの、「同定」や「同一性」を表すものがあることは、ほぼ共通しており、これらはコピュラ文の基本的な機能だと考えられる(Higgins(1979)、西山(2003)、岸本(2012)、他)。眞野(2020a)では、名詞には本来的に指示的な性質を帯びたものと、帯びていないものがあることを指摘した上で、2つの名詞句からなる同格名詞句を分析した。そして、それらの名詞句間にコピュラ文と共通する4つの意味関係(措定・指定・同定・同一性)が観察されることを指摘し、これらが名詞句間に観察される基本的な意味関係であることを主張した。さらに、同格名詞句の構造を、その統語的な制約と機能に従って分類することで、同格名詞句に生じる各名詞句の性質と、それによって決まる語順の許容度の差を説明できることを主張した。形態素が全く介在しないことが、コピュラ文に比べ統語的・意味的制約が多い要因となっていると考えられる。この結果は、表1のようにまとめられる(詳細は、眞野(2020a)を参照)。

表 1. 同格名詞句の分類(眞野 2020a: 85)

機能	NP1	NP2
措定	指示性を帯びた名詞	属性を叙述する名詞
指定	属性を叙述する名詞	指示性を帯びた名詞
同定/同一性	指示性を帯びた名詞	指示性を帯びた名詞

##### ③ 同格名詞句の統語構造

眞野(2020b)では、3つ以上の名詞句からなる同格名詞句を分析することで、同格名詞句の語順の背後に存在する意味的階層構造を(i)のように提案した。

(i) 同格名詞句の意味的階層構造:

ダイクシス名詞句・状態+非飽和名詞+属性(その他)+親族名称(呼称不可)+属性(肩書き:呼称可)・別称+具体的対象(固有名詞)+親族名称(呼称可)・属性(肩書き:呼称可)+再帰代名詞類

森山(2016)は、例示や境遇語が前項名詞に生じる原因として、「情報のアクセスを行うものが

先行し、意味づけを行う別称が本体名詞の直前に位置づけられるという構造」だと述べている。本研究もこの指摘に同意した上で、(ii)のような階層構造としてまとめられる可能性を示した。

(ii) [ダイクシス [非飽和名詞 [属性 [具体的対象] 属性] ] 再帰]

さらに、語や文の構造と同じく、同格名詞句構造においても、文構造で提案されているのと同様の二股枝分かれの統語構造が存在することを指摘し、それにより、一見、意味的階層に反するように思える構造も説明できることを主張した。

## (2) 名詞から類別詞への文法化の研究

「助数詞」というカテゴリーについては、その定義を含め、一致した意見は未だ存在しない。そして、「三つの班／三班」のように名詞としても助数詞的にも使うことのできる語の存在もあり、その扱いについては課題が残されている（助数詞研究の動向のまとめと残された課題については、眞野(2021a)にまとめた）。名詞の統語的特性と機能の解明のために、多数観察される名詞からの類別詞の文法化の過程を統語的に分析し、以下のことを明らかにした。

助数詞の一番重要な機能は、数詞と結びついて、対象の数量を指定する機能だと考えられる。一方で、名詞の重要な機能は、その指示機能と叙述機能だと考えられる。一般的に名詞は、何かの対象物や概念を指し示すという指示機能を持つと同時に、何らかの属性や状態、所属などを表す叙述機能を持つと考えられている。眞野(2021b)では、BCCWJを使用し、現代日本語において名詞と同形の助数詞にはどのようなものが存在するかを見た。また、それらの間にはどのような振る舞いの差異が観察されるのかを、上述の助数詞と名詞の機能にそれぞれ関わると考えられる統語現象を通して検討し、その間にある連続性を、表2のように指摘した（詳細は、眞野(2021b)を参照）。

表2. 名詞と同形の助数詞に見られる差異（眞野 2021b: 83）

語彙		特徴	意味関係	数を数える機能		指示機能
			名詞の数	積み上げ	数の制限	対象との共起
助数詞	-匹, -人, -個		✓	✓	*	✓
典型的	粒, 株, 例, 団		✓	✓	*	✓
↑	大学, 銀行, 契約		✓	*	*	?
名詞と同形	階, 累	序数		✓	*	?
の助数詞	議員, 家族, 作品		✓	*	?	✓
↓	ゲーム, 兄弟		✓	*	?	✓
周辺の	分裂, 連結	主体や結果の数		*	*	#
名詞	学校		-	-	-	-

今後、助数詞とは何か、名詞とは何か、という大きな問いを追求するためには、その文法化の過程と、統語範疇を分ける大きな要因の解明が不可欠だろう。

## (3) 名詞述語文

名詞の持つ叙述機能をさらに検討するため、特に名詞述語が(iii)のような事象叙述を行う場合の特徴を検討し、事象叙述を行う名詞述語文に見られる共通性を探った。

(iii)a. ひどい頭痛だ。 (静的事象叙述)                      b. 電車が到着だ。 (事象叙述)

その結果から、名詞述語文による事象叙述はモノ名詞においては限定的であるが、話者の知覚を通じた時空間への位置づけにより可能となることを主張した。このような事象叙述は、出来事名詞や状態名詞にも可能であるが、異なる振る舞いを見せることも示した(眞野 2022)。これらの名詞述語文の事象叙述の特徴は、名詞が行う叙述の特徴(出来事や属性を1つのまとまりとして完結したものとして叙述する性質)と関わると考えられる。

## (4) 数量詞を含む同格構造

眞野 (to appear)では、「学生 三人」のような数量詞を含む同格構造が、「我々 学生」のような同格名詞句とどのような共通点や相違点を持つかを明らかにすることを目的に、調査をおこなった。数量詞を含む同格構造も、その特徴から同格名詞句と同様の同格構造として位置づけられることを示した上で、数量詞が同格構造の意味的階層構造の中でどのように位置づけられるかを検討し、(iv)を提案した。これは先にあげた(i)の中に数量詞を位置づけたものである。

(iv) 同格名詞句の意味的階層構造(改訂版) :

ダイクシス名詞句・状態+非飽和名詞+属性(その他)+親族名称(呼称不可)+属性(肩書き:呼称可)・別称+具体的対象(固有名詞)+親族名称(呼称可)・属性(肩書き:呼称可)+数量詞+再帰代名詞類

また、数量詞は、同格構造の中で指示機能を担うものであることを主張し、数量詞を含む同格構造の意味関係にどのようなものがあるかを示し、同格名詞句との共通性を明らかにした。

それに加え、これまで数量詞研究で議論されてきた問題(同格構造に生じる数量詞の問題・数量詞遊離現象と解釈の問題)についても、同格名詞句を含めた同格構造全般として検討することで、それぞれの言語現象の解明がさらに進む可能性も指摘した。

## (5) まとめ

本研究では、これらの一連の名詞に関する研究を通し、名詞自体の持つ意味機能と統語的特性、そしてそれに影響を与える要因を明らかにした。特に、名詞がそれぞれ本来持つ指示機能と叙述機能が、それぞれの言語現象において、重要な役割を果たしていることを主張した。また、日本語における名詞に関する形態的・統語的手がかりの少なさの問題ゆえに遅れていた名詞研究ではあるが、手がかりになりうる言語現象はないわけではなく、様々な視点からこれまで分析されてきた現象を見直すことで、名詞の性質を探る手がかりとなりうることも示すことができた。

しかし、本研究を通して示すことができた名詞の性質はまだほんの一部にすぎない。動詞に比べ語数も多く、多様である名詞の性質を明らかにするには、さらなる調査が必要であり、本研究で得られた成果を出発点として、さらに研究を進めていきたい。

## (引用文献)

- 岸本秀樹(2012)「日本語コピュラ文の意味と構造」影山太郎(編)『属性叙述の世界』39-67, くろしお出版.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房.
- 眞野美穂(2016)「日本語同格名詞句についての一考察—固有名詞が含まれる場合—」福田嘉一郎・建石始(編)『名詞類の文法』21-40, くろしお出版.
- 眞野美穂(2017)「日本語の同格名詞句に見る意味的階層関係」関西言語学会第42回大会ワークショップ『名詞句に関わる指示機能と叙述機能』京都大学.
- 眞野美穂(2020a)「同格名詞句における各名詞句の役割」由本陽子・岸本秀樹(編)『名詞をめぐる諸問題』70-87, 開拓社.
- 眞野美穂(2020b)「日本語同格名詞句に見る意味的階層と統語構造についての一考察」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂(編)『統語構造と語彙の多角的研究』73-87, 開拓社.
- 眞野美穂(2021a)「助数詞をめぐる研究の動向と課題」岩男考哲・坂本智香・建石始・益岡隆志・松瀬育子・眞野美穂『名詞研究のこれまでとこれから』くろしお出版.
- 眞野美穂(2021b)「名詞と助数詞の間」岩男考哲・坂本智香・建石始・益岡隆志・松瀬育子・眞野美穂『名詞研究のこれまでとこれから』くろしお出版.
- 眞野美穂(2022)「名詞述語文による事象叙述」日本言語学会第164回大会ワークショップ『叙述類型研究の新たな試み—非典型的な事象叙述・属性叙述をめぐる—』オンライン.
- 眞野美穂(to appear)「数量詞を含む同格構造についての再検討—同格名詞句との比較から—」
- 森山卓郎(2016)「名詞並置型同格構造」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己(編)『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp. 65-82.
- Higgins, F. Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. Garland, New York.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 眞野美穂	4. 巻 37
2. 論文標題 英語からの借用語における形態素の振る舞い 外来語辞典調査からの一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 220-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞野美穂	4. 巻 5
2. 論文標題 クオリア構造と日本語類別詞の研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日語偏誤と日語教学学会（編）『日語偏誤と日語教学研究』創刊5周年記念号	6. 最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞野美穂	4. 巻 1
2. 論文標題 同格名詞句における各名詞句の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 由本陽子・岸本秀樹（編）『名詞をめぐる諸問題：語形成・意味・構文』	6. 最初と最後の頁 70-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 眞野美穂	4. 巻 14
2. 論文標題 数量詞を含む同格構造についての再検討 同格名詞句との比較から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『現代日本語研究』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 眞野美穂
2. 発表標題 クオリア構造と日本語類別詞の研究
3. 学会等名 2019年日本語誤用と第二言語習得研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miho Mano, Yuko Yoshinari, Kiyoko Eguchi, Yo Matsumoto
2. 発表標題 Difficulty acquiring Medial Path expressions for L2 learners: An experimental study on motion events with various Paths
3. 学会等名 EuroSLA（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞野美穂
2. 発表標題 日本語同格名詞句から見る名詞句の機能について
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 眞野美穂
2. 発表標題 名詞述語文による事象叙述
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩男考哲, 坂本智香, 建石始, 益岡隆志, 松瀬育子, 眞野美穂	4. 発行年 2021年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 255
3. 書名 名詞研究のこれまでとこれから	

1. 著者名 于一楽, 江口 清子, 木戸 康人, 眞野 美穂(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 384
3. 書名 統語構造と語彙の多角的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------